第２版はしがき

本書の初版を公刊してから７年が経った。その間，たいへん多くの読者に支持され，増刷を重ねてきたのは，本当に喜ばしいことである。だが，正義論の研究状況は日進月歩であり，また本書であつかわれている現実の諸問題も変化しつづけているため，初版の内容の一部は学問的・社会的な現状にそぐわなくなってきた。そこで，初版を大きく改訂して世に送ることにした。

第２版では，研究が急速に進展してきた差別について，第９章でくわしく解説している。ほかの章でも，不正義論（第１章），関係論的平等主義（第４章），全運平等主義（第５章），存亡リスク（第14章）など，新たな節を追加した。その他，すべての章にわたって，内容を更新するとともに，論述をいっそう平易にした。コラムとケースでも，大幅な追加や差し替えを行っている。さらに，講義やゼミナールで教科書・参考書として使用していただく際，受講生の理解が進むよう設問をあらたに設けた。

初版が公刊された後，法理学研究会・京都生命倫理研究会（2019年）と東京法哲学研究会（2020年）で合評会が開かれ，評者の方々から示唆に富む質問・コメントを受け取り，今回の改訂にあたって大いに参考になった。京都で評者を務められた大澤津・角崎洋平・福家佑亮各氏と幹事の浅野幸治・戒能通弘・小門穂・野崎亜紀子各氏，東京での評者である加藤晋・瀧川博英・森村進各氏と新旧幹事の大屋雄裕・横濱竜也両氏に深くお礼を申し上げたい。また，共著者がそれぞれ，読者からいただいた感想や，担当する毎年度の講義・ゼミナールで受講生から出された多様な質問・感想も，改訂に活かされている。

第２版の公刊にあたって，方針策定から執筆者会議を経て完成にいたるまで，法律文化社の舟木和久氏に一方ならぬお世話になった。図表の追加・修正や表紙の作成では，宇佐美のリサーチ･アシスタント吴若楠さんの助力を得た。

2026年８月10日

著者を代表して　宇佐美　誠

初版はしがき

誰もが幸せになりたいと思っていることだろう。では，幸せになるには何が必要だろうか。あなたには魔法の腕時計があると想像してほしい。左腕につければ普通に使えるが，右腕につけると，あなたは誰からも見えなくなる。どんなに悪いことをしても，人に知られない。気に入ったジャケットを店から持ち出すことも，好きな歌手のコンサートをタダで聴くことも，無賃乗車で旅行することもできる。透明人間となって自分の欲望のままに生きるとき，本当に幸せだろうか。幸せとは言えないと感じるならば，あなたは，幸せになるには不正を行わないことが必要だと考えているのである。もちろん，不正を行わない人が必ず幸せになれるわけではないが，しかし不正を重ねる人生が幸せな人生だとは考えにくい。

では，不正を行わないためには，何が必要だろうか。少数派民族が日ごろ差別を受けている国を想像してみよう。あなたは少数派民族で，多数派民族の店主がやっている雑貨屋でまじめにはたらいていたが，言いがかりをつけられ辞めさせられてしまった。他の職はなかなか見つからず，この国には失業保険も生活保護もない。家には，病気で床にふせっているお母さんがいるが，食べ物を買ってあげることもできない。ある日，パン屋の店先でおいしそうな大きなパンを見つけたが，店員がまわりに見当たらない。あなたは，お母さんのために思わずパンを盗んでしまうかもしれない。このように，個人が不正をしないためには，本人の心がけだけでは不十分で，社会に重大な不正がはびこっていないことも求められる。

ここまでの説明から，私たちが幸せになるには，不正を行わないことが必要であり，そして不正を行わないためには，社会に深刻な不正がないことが重要なのだと分かる。つまり，誰もが望む幸福のためには，社会が正しいことが求められるのである。社会の正しさは，法哲学・政治哲学・倫理学・社会哲学などの分野で研究されてきた。

これらの分野の学部レベルにおける講義や演習で広く使える共通の教科書として書かれたのが，本書である。正義論という大きな枠組みのもとで，自由や

平等についてもくわしく解説し，さらにさまざまな現実問題への応用を説明している。社会の正義について，基礎知識から近年の研究成果までを示しているだけでなく，読者が自ら主体的に考えるようにうながしてもいる。

＊　＊　＊

本書には３つの特徴がある。第１に，正義論は過去50年間に飛躍的に発展してきたが，その古典的な学説・学派から最近の論点や理論までをわかりやすく説明している（第１部）。まず，ジョン・ロールズの正義理論と功利主義をくわしく解説する。次に，何を分配するか，個人の責任をどこまで問うべきか，分配がめざす目標は何かという近年のおもな論点を順に検討してゆく。さらに，リバタリアニズムと左派リバタリアニズムも取り上げる。その他にも，コミュニタリアニズムなどの重要な思想潮流がコラムで紹介される。

第２に，今日の日本社会や国際社会で生じているさまざまな現実問題に焦点をあてている（第２部）。貧困と格差，教育と家族，医療と健康，死刑，戦争，人口問題，地球環境という，まさにいま鋭く問われている問題ばかりである。正義･自由･平等に関する一般理論がこれらの問題にどのように応用されるか，またそれぞれの問題に固有の学説や論点は何かを学ぶことができる。他にも，移民，ソーシャル・キャピタル，社会的割引率などの重要なトピックが，コラムで紹介されている。

第３に，すべての章でケース（架空例）が挙げられている。読者はまず，架空の状況について自分の直観的な意見を求められる。次に，特定の学説をその状況に適用したり，学説の弱点を発見したり，複数の学説の衝突を理解したりするようにうながされる。架空例は，海外の法哲学・政治哲学・倫理学で多用されている思考実験という方法に基づいている。さまざまな思考実験を体験するなかで，哲学的思考の醍醐味を味わうことができるだろう。

この教科書は，半期講義科目で使いやすいよう全14章で構成されている。だが，それにとどまらず，理論志向の科目では第１部のみを読み進めたり，現実問題を素材としたゼミでは第２部だけを用いたりすることもできる。さらに，法哲学・政治哲学・倫理学・社会哲学の最近の研究状況を効率よく把握したいときにも，本書は大いに役立つはずである。各章の末尾には，比較的平易な参

考文献を挙げ，また巻末には，研究者や院生に活用していただけるよう詳細な文献一覧を設けてある。

＊　＊　＊

本書の執筆は，執筆者４名が集まり，全員で目次を策定することから始まった。各自が担当章の草稿を持ちよって，終日におよぶ執筆者会議で読み合わせを重ねつつ，原稿を確定していった。したがって，各章や各コラムは担当者によって執筆されているものの，全員による検討を経ている。

執筆期間の大半には，法律文化社の元編集者・上田哲平氏に一方ならぬお世話になった。機敏な作業，有益な助言，そして大きな熱意で支えていただいた。また，上田氏が法律文化社を離れられた後は，舟木和久氏が丁寧かつ臨機応変な編集作業をして下さった。文献一覧の整序にあたっては，京都大学大学院生・白井ひかるさんの助力をえた。

正義論は，学ぶ人を悩ませる一方で，心躍らせる不思議な魅力をそなえていると思う。ここには，何が正しい状態なのか，何が正しい制度なのかをくりかえし問い，答えようとする飽くなき人間の営みがある。その背後にあるのは，すべての人が幸せになる社会のあり方を探し求める熱い思いである。本書を通じて正義論の魅力を読者に伝えられればと願っている。

2019年７月15日

著者を代表して　宇佐美　誠